

きみの顔にさよならを描く

○寺・本堂

高橋友介（ヨ）、中年の夫婦に額縁に入った絵（冥婚絵馬）を渡す。冥婚絵馬には白無垢姿の女性と、袴姿の男性が描かれている。夫、冥婚絵馬を受け取り微笑む。

夫「きれいに描いてもらって……」
目に涙を浮かべる妻。
その手には振袖姿の女性の古い写真。友介の後ろに座っている高橋朔（コ）、つけているマスクを引き上げ直す。

○駅・構内

帽子・サングラス・マスクをつけた新田水乃（コ）、歩いている。
女子中学生二人とすれ違う。
女子中学生「芸能人？ 芸能人？」

○寺・本堂

法衣姿の佐藤和彦（ヨ）、お経をあげている。
目を閉じている中年の夫婦。
合掌している友介。
朔、ぼんやりと壁を見上げる。
壁一面に、洋装や和装の男女の結婚姿を描いた冥婚絵馬が、隙間なく飾られている。
朔「（見つめて）……」

○山道

水乃、息を切らしながら歩いている。
汗でマスクが顔に張り付いている。

○寺・本堂前

妻「今頃、周りの子と同じように花嫁姿でも見れたのかななんて主人と話していたんです」
夫「きれいな花嫁さんになりたいって、よく

言っ
たの
彦「冥
た方
娘さん
ごしに
夫「本
友介、
会積する。」

葉えてあ
げられな
かつ

和彦「冥
婚絵馬と
いうのは
、未婚で
亡くなっ
た方の魂
を供養す
るという
ものです
から、

「あちら
の世で幸
せにお過
す。」

夫婦、和
彦と友介
に頭を下
げる。

夫「本
当に、あ
りがとう
ございました」

○山道

果てしなく続く石段を見上げる水乃の後ろ姿。

○同・山門

ほうきを持っている朔、スマホを見て
いる。
マスクは顎まで下げている。
スマホの画面には『メンズも二重整形！』と書かれた美容外科のHP。
朔、ため息をつく。
石段を上がってきた水乃。
水乃「あの……」
朔、慌ててマスクを引き上げる。
水乃「死んだ人の結婚の絵を描いてくれるって聞いたんですけど」
朔、水乃をじっと見つめる。
風が強く吹き、水乃の髪を揺らす。

○同・本堂

壁の冥婚絵馬を見ている水乃。
帽子・サングラス・マスクは外して
いないため表情が見えない。
朔、マスクを引き上げながら入ってくる。
朔「すみません、おじ——（言い直して）絵
師がどっか行っちゃってて。すぐ戻るとは
思いませんけど」
水乃「死んだ人と結婚できるんですよね？」
水乃、壁の冥婚絵馬を指さす。

朔「え？」
 水乃「私と彼氏の絵、描いてもらいたいんです。あんな風に！　そしたら、彼と結婚できますよね！」
 朔「え？　あー……」
 水乃「朔、首をかしげる。」
 朔「あの、詳しいことは分かんないです……」
 水乃「俺は雑用なんです」
 朔「……嫌です」
 水乃「……うつむく。」
 朔「あの……」
 水乃「嫌！　絶対に結婚する！」
 朔「あの、落ち着いて」
 水乃「できないんだったら……。嘘つきの寺だつて、晒してやる！　炎上させてやる！」
 ヒュッと息を呑み硬直する朔。
 段々と息が荒くなる。
 水乃「水乃、チャッカマンを取り出す。」
 朔「（我に返って）物理的に？！」
 朔「朔、慌てて水乃を取り押さえる。」
 水乃「朔、やめろ！」
 朔「ちよ、やめてって！　彼と私の絵を描いて！」
 朔「ちよ、やめてって！　」
 朔「揉み合いになる朔と水乃。」
 朔「分かった！　分かった！　描く！　描くから！」
 水乃「水乃、朔から離れる。」
 水乃「……言いましたね」
 朔「（息切れして）ちよ、まじで、危ないから」
 水乃「描いてください。彼と……」
 水乃「水乃、うつむいてサングラス・マスクを外す。」
 朔「朔、水乃をじっと見つめる。」
 水乃「……私の顔」
 水乃「水乃、帽子を外し、ゆっくりと顔を上げる。」

その顔は目も鼻も口もない。
まるでのつぺらぼう。
朔「……うわあああああ！」

横たわっている朔。
マスクは外され、枕元に置いてある。

ゆつくりと目を開ける朔。
友介とのつぺらぼうの水乃が顔を覗き

込んでいる。
友介「（気づいて）おお、朔。気が付いたか」

朔「うわあああ！」
水乃、サングラス・マスクをつける。

朔「おじさん！こここの人！」
友介「うん」

朔「お婆け！あれだ！のつぺらぼう！」
友介「お婆けや、妖怪ではないよ。こちらは

普通の、人間のお嬢さんだ」
朔「はあ？顔ないんだよ！」

友介「まあ不思議なことではあるが」
友介「水乃を見る。」

水乃「……一か月前に」
水乃、スマホを操作し、友介と朔に見

せる。
スマホ画面には『うおた』というアカ

ウントのSNSが表示されている。
朔、慌ててマスクをつける。

友介、老眼鏡をかける。
画面には六月十五日の投稿が表示され

ている。
友介「（読み上げて）残高不足で改札詰まら

せちやって顔ない」
水乃「投稿した次の日、朝起きたら」

友介「なるほど」
朔「なるほど！ありえないだろ、普通」

友介「言霊というのがあるからね。言葉にし

たことが現実になったのかもしれない」
朔「あの、顔ないっていうのはそう意味じゃ

……」
水乃「まあそれは置いといて」

水乃「亡くなった彼と、私の絵を描いてください」

友介「水乃、水乃に向き直す。」

水乃「新田水乃です」

友介「水乃さん。描くことは、できません」

水乃「え……。どうしてですか？　だってネッ」

友介「冥婚絵馬は、亡くなった方と結婚する

ためのものではありません。インタ―ネッ

トでは間違った情報が出ているようですが」

水乃「じゃあ私は――」

友介「冥婚絵馬には描けないんですよ。生き

ている方は――」

水乃「うつむく。」

友介「生きている方を冥婚絵馬に描くと、あ

ちらに連れていかれる、という考えがある

からです。ですので、その亡くなった方を

供養するなら、架空の女性と――」

水乃「嫌です！」

水乃「水乃、立ち上がる。」

水乃「彼と結婚するのは私です！　他の女と

なんか、絶対嫌です！」

友介「落ち着いてください」

水乃「その人は描くって言ってました！」

水乃「水乃、朔を指さす。」

友介「朔を見る。」

朔「え、ええ――」

○駅・ロータリー（夕）

水乃「水乃、車から降りて来る。」

友介「運転席の友介に会釈する。」

友介「最近まで東京に住んでいたか。うちの甥も

ね、友介、後部座席の朔に視線をやる。」

友介「朔といます。高橋朔」

朔「ちよっと」

水乃「朔の方を見る。」

朔「マスクを引き上げうつむく。」

友介「そのお顔のこと、何か力になればいいんですが」
水乃「顔はどうでもいいんです。ただ、私は彼と結婚したくて」
友介「それは、できません。別の方法での供養を一緒に考えましょう。大切な人でしょうから」
水乃「はい。……だから、諦めません」
水乃「朔、チラッと窓の外の水乃を見る。
水乃「ありがとうございました」
水乃、会釈して駅へ歩いていく。

○車内（夕）

朔「あの子、諦めないとか言ってたけど。どうすんの？」
友介「どうするんだ？」
朔「は？」
友介「朔が描くって言ったんだろう」
朔「言うしかなかったんだって！」
友介「言葉には責任を持たないと」
朔「……」
友介「でもまあ、言ったように、生きている方の顔は描けないからねえ」
朔「そもそも顔ないじゃん」
友介「車が信号で停止する。」
友介「バックミラー越しに朔を見る。
友介「亡くなった方と、架空の女性を描くしかないよ」
朔「……俺は描かないよ」
友介「絵得意じゃないか。小さいときから描いてたし、高校も——」
朔「描かないって！」
朔、友介から目をそらす。
友介「ふと助手席を見て、
友介「うん？ 何だこれ」
朔、気になって友介の方を見る。

○新幹線・車内（夕）

スマホを操作している水乃。

画面には『たろ』のSNSアカウントが表示されている。アイコンもヘッダーも真っ黒の画像。スクロールして最新の投稿を見ると、六月十五日に『たろの親族です。たろは六月二日に永眠いたしました』と投稿されている。水乃、帽子を深く被り直す。

○繁華街（日替わり）

人で賑わっている。キャップとマスクをつけた朔、歩いている。ふとファッションビルが目に入る。『さくら崎イラスト展』と書かれた広告が大々的に飾られている。朔、目を伏せる。ビルの前に帽子・サングラス・マスク姿の水乃、立っている。朔、水乃に駆け寄り、少しキャップを上げる。

水乃「あー朔、慌ててキャップを深く被る。」

朔「これ朔、水乃に封筒を渡す。」

朔「車に置いていったでしょう。」

水乃「はい、依頼料です。」

朔「描いてないですよ。」

水乃「一口コミ書きますよ！」

朔「あなたの顔は描けません。」

水乃「周囲の人が朔と水乃を見ている。」

○カフェ・店内
かい合わせで座っている朔と水乃。向かい合っ

店員「お待ちせしました」
 朔、マスクを下げクリームソーダを飲む。
 みる。チラッと水乃を見ると、じっと座っている水乃。
 水乃「自分の方の前のクリームソーダを朔の方に寄せる。」
 朔「私飲めないんで、よかったら」
 水乃「……ご飯とかどうしてるんですか」
 朔「へえ……」
 朔「朔、水乃の身体をじっと見る。」
 水乃「……目はなくても見えますから」
 朔「え、あ、すみません……」
 水乃「朔、クリームソーダを飲む。」
 朔「……彼とは、八月に結婚するつもりでした」
 水乃「二人とも、十八になるから」
 朔「あ、そうなんですか……」
 水乃「おじいちゃんおばあちゃんになっても、ずっと一緒にいようねって。なのに……」
 水乃「水乃、うつむく。」
 水乃「……声が震えて」死んじやったんです……私を置いて」
 水乃「朔、鳴咽を漏らす。」
 朔、氣まずそうに周囲をキョロキョロ見渡す。
 テーブルに置いてあった紙ナプキンを取り、水乃に差し出す。
 水乃「へ鼻をすすって」大丈夫です」
 水乃「水乃、サングラスを外す。」
 水乃「水乃、サングラスの内側を朔に見せる。」
 水乃「意外と便利なんですよ、顔ないって」
 朔「……いいですね」
 水乃、朔を見る。

朔、水乃から目をそらし、水乃のクリムソーダを飲む。

○同・男子トイレ

朔、個室から出てくる。

手洗い場で手を洗う。

ふと、目の前の鏡を見る。

キャップとマスクの間から、まっすぐ

自分の顔を見つめる。

朔、目をそらす。

○同・カフェ

水乃、朔の荷物を漁っている。

トイレから戻ってくる朔に気づく。

慌てて荷物を戻す。

朔、席につく。

水乃「大丈夫ですか？」

朔「はい……」

朔、お腹を擦る。

○駅（東京）・改札前

朔・水乃、歩いてくる。

水乃「いくら出せば描いてもらえますか」

朔「諦めてください。この前のは勢いで言っ

ちやっただけなんです」

水乃「——でもあなた、絵描けますよね」

朔、立ち止まり水乃を見る。

水乃、朔にスマホを見せつける。

画面にはSNSの投稿の下書きで、カ

フェで撮影された朔の学生証の写真と、

寺の住所が記載されている。

水乃「虹が原学園高等部美術科、二年三組、

高橋朔」

朔「いっ——」

水乃のサングラスに朔が映っている。

水乃「やっぱり、あの高橋朔、ですよね」

朔、呼吸が乱れてくる。

○（回想）高校・廊下
歩いている朔。

朔「あの！　さあ……」

友介「うん？」

朔「その、冥婚絵馬を描く上でのルールって
いうか、なんかあるの？　どの画材使うと
か」

友介「そういうのはないけれど」

友介「友介、朔をじっと見つめる。」

朔「いや、ほら俺もお寺で手伝わしてもらっ
てるし、少し気になって」

友介「……（微笑んで）そうか。興味を持つ
てくれたことは嬉しいよ」

朔「うん。あ、俺米炊くね」

朔「朔、出て行こうとする。」

友介「朔」

朔「……はい」

友介「どうして冥婚絵馬に生きている人を描
いてはいけないか、分かるよな？」

朔「分かるよ。あの世に連れてかれるからで
しょ。怖いね」

朔「朔、出て行く。」

○同・朔の部屋（日替わり）

朔「朔、カバンをじっと見つめている。」

朔「深呼吸し、開くと、中には絵具や筆が
入っている。」

○公園

帽子・サングラス・マスク姿の水乃、
ベンチに座っている。

朔「キャップ・マスクをつけた朔、歩いて
くる。」

水乃「水乃、気づいて立ち上がる。」

水乃「暑くないんですか」

朔「そっちこそ」

水乃「この顔を晒せと？」

朔「こっちだって」

朔・水乃、睨み合う。

○集会所・和室

朔「朔、窓を開ける。」

朔「暑……」

朔「マスクを外す。

扇風機のスイッチを入れる。

水乃「わぁ、朔の絵具や筆を見ている。」

朔「……本当にいいんですか」

水乃「はい」

朔「ガチかは分かんないけど、あの世にか

って……」

水乃「お願いします」

水乃「水乃、土下座する。」

水乃「彼と、結婚したいんです。死んでも」

朔「……頭を掻く。」

朔「……じゃあと、あえず、その彼氏から描

くんで。写真、ください」

水乃「写真？」

朔「はい」

水乃「あ……。ないです」

朔「え？一枚も？」

水乃「はい」

朔「マジかよ。あー、じゃあどんな顔でした

か」

水乃「え？」

朔「写真がないなら情報聞いて描くしかない

でしょ。どんな感じでした？」

水乃「……分かんないです」

朔「はい？」

水乃「……会ったこと、ないので」

○同・縁側

朔「並んで座っている朔と水乃。」

朔「ネット恋愛？」

水乃「病み垢で繋がって」

朔「朔、眉をひそめる。」

水乃「（気づいて）変なのじゃないですか

ら！」

朔「顔も知らないのに結婚とか言ってたの？」

朔「私たちは真剣だったんです！私には彼

しかいなくて、彼には私だけだった……」

朔「……でも顔が分からないんじゃないじゃ描きよう

水乃「ないですよ」

水乃「なんとかします！だから」

水乃「（か細く）お願い……」

震える水乃の肩に触れようとする。

画面には朔の学生証の写真。
朔、舌打ちする。

○寺・庫裏・居間

友介・和彦、一つのスマホを一緒に見て

和彦「んだんだ。これで、矢印を」

友介「おお！送れた送れた」

和彦「頼みますよー。私より若いのに」

友介「いやあどうも機械には疎くて」

和彦「和彦、スマホを覗き込んで、」

友介「弟さん？」

友介「はい。朔の画材とか、こっちに送って

もらおうかと思って」

和彦「朔くん、どだ？」

友介「元氣になっけてきているかなと思います。

最近、冥婚絵馬にも興味を持ち始めたみた

いで」

和彦「おっ！跡継ぎかあ？」

友介「和彦、友介の背中を叩く。」

友介「そんな大きなことは望んでないですよ。

ただ、あの子が……」

友介「友介、遠くを見つめる。」

友介「また絵を描いたら……」

○集会所・和室

水乃、スマホを操作している。

朔、スマホで『たろ』の投稿を見てい

る。ふと水乃を見ると、扇風機の風で水乃

の髪が揺れる。

朔「あんたの写真は？」

水乃「（スマホを見たまま）はい？」

朔「あんたのも写真見て描くしかないでしょ」
水乃「：：写真嫌いなのでないです。まあそれ
もなんとかしますんで」

朔「：：スマホを操作している水乃を見つめる。
水乃「：：顔、取り戻したいとかは思わないの」
水乃「：：思わないですね。別になくても困らな
いし」

朔「いや困るでしょ、日常生活とか」

水乃「学校通信なんで」

朔「：：親とか」

水乃「私の顔なんて見てませんよ」

朔「：：そ」

水乃「なんか距離詰めてきましたね」

朔「は？」

水乃「タメ口。私そういうの気になるんです」

朔「生きづらそ：：」

水乃「別にいいんですけど、急に来たから」

朔「あんたみたいなのに敬語使うのが馬鹿ら
しくなっただけ」

水乃「随分嫌われちゃいましたね」

朔「脅してくるような奴好きなるわけねえだ
ろ」

水乃「顔を上げ、

水乃「何だっていいけど、最後まで協力して
もらうから。私たちは禁忌を犯す共犯者な
んだから」

朔「水乃を見つめる。」

○バス停（夕）

朔「朔・水乃、並んで立っている。」

水乃「：：」

水乃「：：」

朔「田舎だからね」

水乃「：：」

朔「：：」

水乃「：：」

朔「：：」

水乃「：：」

朔「：：」

水乃「：：」

朔「：：」

水乃「：：」

朔「：：」

水乃「：：」

朔「：：」

水乃「：：」

朔「：：」

水乃「：：」

朔「あ、来た」バスが来る。

水乃「彼の写真、もうちょっと待って。なんとかフオロワーさんとか探ってみる」なん

水乃「バスに乗り込む。朔、水乃の後ろ姿を見つめる。」

朔「――ねえ」水乃「振り返る。」

水乃「その彼氏ってなんで亡くなったの？」

水乃「：：：なんでかな」バス「バスの扉が閉まる。」

水乃「バスが出発する。」朔「バスを見送る。」

○一軒家・居間（夜）

友介「夕食をとっている朔と友介。」

朔「ま、あ、ちよっと」朔「友介から目をそらす。」

友介「：：：そういえばもうすぐ夏休みだな」

友介「：：：俺には関係ないけど」

友介「家に帰ったりしないのか？」

友介「朔、食べていた手が止まる。」

友介「お母さんもお父さんも、心配してるよ。」

朔「たまには顔を見せてあげないと」

朔「顔見たくないって追い出されたのに？」

朔「立ち上がり出て行く。」

友介「ため息をつく。」

友介「スマホを手に取りメッセージアプリを開く。」

友介「『高橋大介』に『朔の画材が家にあればこつちに送ってもらえませんか。朔は元気です。』とメッセージを送っているが、返信はない。」

○同・朔の部屋（夜）

朔「朔の部屋（夜）」

朔「ベッドに寝転んでいる。」

朔「マスクをつけ、スマホを手取る。」

朔「SNSアプリを開き、『うおた』のアカウントを表示させる。」

プロフィール欄には『唯一の人たる』
と書かれている。
朔、フロロボタンを押す。
と同時にメンションの通知が来る。

朔「うん？」

『林檎宮みる』というアカウントから
『誰ですか？』とメンションでメッセ
ージが来ている。

朔「誰……？」

次々と『何者ですか？』『答えない
ですか？』『ひよってんですか？』と
メンションでメッセーじが届く。

朔「なになにな……」

朔、マスクを引き上げる。

通知の音が鳴りやまない。

電話の子機が鳴る。

ビクツとする朔。

息が荒くなってくる。

○（回想）マンション・リビング

電話が鳴り響いている。

高橋美奈枝（あ）、耳を塞いで床にう

ずくまっている。

床には弁護士事務所からの封筒や、

『お前が死ね』など書いてあるチラシ

が散らばっている。

立ち尽くしている制服姿の朔。

○（戻って）一軒家・朔の部屋（夜）

電話が鳴り響く中、呼吸が荒い朔。

震える手で子機を取る。

朔「（電話に出て）……はい」

水乃（電話）「新田水乃と申しますが、あの、

朔さんいますか？」

朔、大きくため息をつきマスクを顎ま
で下げる。

朔「はい……。俺です」

水乃（電話）「ああ。あの、もしかして林檎

宮って人からなんか来てない？」

朔、スマホを見る。

『林檎宮みる』からメンションでメッ
セーじが次々と来ている。

朔「来てる」

水乃（電話）「やっぱり。この人、私のアカ
ウント監視してて。なんか動きあればすぐ

絡んでくるんだよね」

朔「何なの、この人？ 怖いんだけど！」

水乃（電話）「……彼氏の、元カノ」

○同・玄関（日替わり・朝）

マスクをつけた朔、靴を履く。

友介「居間から出る。」

友介「どっか出かけるのか？」

朔「あ、えっと」

友介「うん？」

朔「……家、帰ろうかと思って」

朔、友介から目をそらす。

友介「微笑んで、

友介「そうか。きつと喜ぶよ」

朔「じゃああの、いつてくる」

友介「駅まで送るよ」

朔「いや！ 大丈夫！」

友介「そう？ じゃあ気をつけてな」

朔「うん」

○集会所・入口

朔、周囲をキョロキョロ見渡し、マス
クを外してから入る。

○同・和室

朔「（ハ）打ち込みながら）たろの友達です。彼
の写真が欲しいのですが持ってたりますか。彼

水乃「他の女の子のツットとかでもいいです」

朔「他に写真持ってる人いなかったんだろ」

水乃「そうだけ……あー無理すぎる！」

水乃、頭を抱える。

朔「水乃、水乃を見てため息をつく。」

朔「あ、来た」

朔のスマホに『林檎宮みる』からDMの通知。DMを開くと、『持ってるけど嫌ですw』と返信が来てる。

みる(DM)「てか前うおただろ。捨て垢使ってたまで絡んでくんないよ。うちと付き合ってたろは幸せだったのにw」

水乃「(打ちながら)捨てられたごみなんだから黙っとけよ」

朔「水乃からスマホを取り戻そうとするが、止まらない水乃。

水乃「(打ちながら)すぐ振られたくせに。未練あんのキモすぎ。別れてんのが全てだろ。いいから黙って死——」

朔「本当にやばいラインってあるから。うん」

水乃「：：ごめんなさい」

みる(DM)「謝罪するならビデオ電話で土下座するのが誠意なんじゃないですかw」

朔「まあ：：顔を見た方が、歯止め聞くんじやないの」

水乃「ため息をつく。

水乃「スマホでビデオ電話をかけている。

朔「向かい側に座り見守る。

水乃「あの、うおたです。初めまして」

みる(電話)「もしもし」

水乃「：：さっきはごめんなさい。言い過ぎでした。あ、顔が見えないとお互いまたヒートアップしちゃうかなと思って。よかったです。カメラ、つけてくれませんか」

みる(電話)「無理。そっちだって顔隠してる。

水乃「これは：：」

みる（電話）「どうせブスなんだろ！　こブ
スが最後の彼女とか、たろがかわいそう！」
水乃、サングラスとマスクを外す。
のっぺらぼうの水乃が画面に映る。

朔「ちよっ！」
みる（電話）「……（笑って）何そのフィル
ター！　だっさ！」
水乃、スマホ画面をじっと見つめてい
る。

みる（電話）「スクショして晒してやるから」
電話口でガサガサ動く音が聞こえる。

みる（電話）「あ」
カメラがオンになり、画面に林檎宮み
る（㊦）の姿が映る。

水乃「あ」
カメラがオフになる。

みる（電話）「見えてないよね？　見えてな
いよね？」

水乃「……今のスクショしたからな」

みる（電話）「ひっ……」

水乃「晒されなくなったらカメラつけろ」

朔「おい」
カメラがオンになる。

みるの姿が映る。

ノートで口元を隠している。

ノートには『六年二組林田未空』と書
いてある。

水乃「……何、歳？」

○マンション・子ども部屋

ベッドの上でスマホを持っているみる、
気づいて慌ててノートを隠す。
学習機の横にはランドセルがかかって
いる。

みる「……十二」

○集会所・和室

朔、眉をひそめる。

朔「引くんだけ……」

水乃「（朔に）そんな人じゃない！」

みる（電話）「だからバレて振られたんだってば！」

みる（電話）「水乃、スマホを見る。数Aが苦手って言うから、私は数Dまでできるよって言ったから……」

○マンション・子ども部屋

みる、スマホを見ている。

水乃（電話）「会ったこととかは？」

みる、首を横に振る。

水乃（電話）「写真は？」

みる「……ない」

○集会所・和室

水乃、大きくため息をつきサングラス

とマスクをつける。

水乃「もう私に関わってこないで。できる？」

みる（電話）「……逃げるんだ？」

水乃「は？」

みる（電話）「あんたと付き合ってなければ

たろくんは死んでなかった！」

水乃「……とにかく、もう関わってこないで」

みる（電話）「逃げんな！ ばあ！」

水乃「言っとくけど、フィルターかけてない

から」

みる（電話）「え……？」

水乃、電話を切り、スマホを放り投げ

る。

朔「トラウマになるんじゃない……」

水乃「子どもはネットなんかしない方がいい

でしょ」

○田んぼ道（夕）

水乃 歩いている朔と水乃。

水乃「もうバスないと……」

朔「新幹線間に合う？」

水乃「いや、どちらにせよ冥婚絵馬ができる

までは帰らないつもりで来たし」

水乃、背負っているリュックを朔に見

せる。

水乃「泊まるよ」

朔「どこに？」

水乃「ネカフェかカラオケ。どこ？」

朔「あー……」

○寺・庫裏・玄関（夜）

和彦、戸を開ける。

朔・水乃、立っている。

和彦「あれ、朔くん？　どしたんだ？　友介

さんならさっき帰った——」

和彦「和彦、水乃に気づいて、

朔「デートか？」

女「今日の泊まるのじゃないんですけど、あの彼

帰れなくて」

和彦「まっ、男にはそだな時もあったぺな。オ

ーケー、オーケー」

朔「ありがとうございます」

和彦「寝室は別だぞ」

朔「だからそういうのじゃないです」

○同・同・寝室（夜）

朔、スマホを見ている。

画面にはSNSが表示されている。

『井さくら崎イラスト展』がついた投

稿がたくさん流れてくる。

和彦の声「おーい」

○同・同・居間（夜）

朔、入ってくる。

和彦「水乃ちゃん？　さっき風呂入ってた

みたいけど」

朔、周囲を見渡す。

朔「探してきます」

○同・本堂（夜）

タオルを肩にかけた水乃の後ろ姿。

水乃の前には壁一面の冥婚絵馬。

朔、入ってくる。

朔「ここにいた」

水乃「水乃、タオルを顔に巻く。」

朔「不気味だよな」

水乃「朔の方を向く。」

朔「死んだ人をわざわざ絵にして結婚させるとか」

水乃「不気味ですか」

朔「うん。あんたは特に。自分が死んでも結婚したいとか何で思えるの」

水乃「愛してるから」

朔「ネット恋愛でしょ？ 顔も知らないくせに。相手おっさんだったかもよ？ 高校生になりすまして、投稿も全部嘘で——」

朔「泣いてる？」

水乃「え？ 違うよ、髪拭いたから」

朔「ああ、そっか」

水乃「……勝手に入って怒られるかな。行こ」

朔「水乃を追って出て行く。」

水乃「……」

朔「……」

水乃「……」

朔「……」

水乃「……」

朔「……」

水乃「……」

朔「……」

水乃「……」

朔「……」

水乃「……」

朔「……」

水乃「……」

朔「……」

水乃「……」

朔「……」

水乃「……」

朔「……」

水乃「……」

朔「……」

水乃「……」

朔「……」

水乃「……」

朔「……」

水乃「……」

朔「……」

水乃「……」

朔「……」

水乃「……」

朔「……」

○アパート・玄関前

友介、チャームを押す。

美奈枝「美奈枝、ドアを開ける。」

友介「どうも。朔は元気ですか」

美奈枝「え？」

高橋大介（あ）、玄関に来て、

大介「そんなやつ、いない」

友介「……」

○同・本堂

川本紗季（さ）・川本陽太（ひ）、座

ついている。

紗季「向かい側に座る和彦。」

和彦「ご連絡した川本です」

和彦「遠かったでしょう。よくお越しくださいました」

紗季、チラッと和彦の後ろのマスクを

つけている朔と帽子・サングラス・マ

和彦「（気づいて）うちの手伝いをしてくれ

紗季「いる子たちです。席、外させますね」

朔・水乃、チラッと顔を見合わせる。

陽太「亡くなってから、まだ十八歳にもなっ

てないのですが、描いていただけるもので

すか？」

和彦「はい。幼くして亡くなった場合、結婚

ができる年齢になってから供養するというの

が一般的ですけども、私はご家族の心に寄

り添いたいと考えております。供養する方

が望むのであれば、いつでも描くことはで

きますよ」

紗季「よかった……」

和彦「陽太、紗季の背中をさする。」

とても温かい絵を描く人でしてね。お父様

お母様の話をよく聞いて描いてくれると思

いますよ」

陽太「はい」

和彦「子どものときの写真をもとに、大人になつた姿描くということも何回かしてまし
てね」

紗季「これだったら天国で幸せになつてくれ
るよね」

陽太「うん」
和彦「お写真は大事に扱わせていただきます。
お預かりしてもよろしいでしょうか」

紗季「はい。よろしくお願いします」
紗季「手帳から写真を取り出し、和彦に差し出す。
差し出されたのはエコ写真。
朔、エコ写真を見つめる。」

○同・山門
石段をゆっくり下りる紗季と陽太。

○同・本堂
和彦、エコ写真を見つめている。
朔、マスクを外し、覗き込む。

和彦「水子供養として冥婚絵馬を描くことも
あんだ」

朔「へえ……」

水乃「水乃、座布団を片付けようとする。」

○山道

陽太「陽太、電話をかけている。」

陽太「はい。降りたところに」

水乃「水乃、駆けて来る。」

水乃「あの！」

紗季「紗季、水乃に気づく。」

水乃「これ、忘れものです」
差し出した水乃の手には、チェーンが
壊れたマタニティマークのキーホルダ
ー。

紗季「紗季、自分のバッグを見て、
あ。ごめんなさい、ありがとう」
陽太、キーホルダーを見て、

陽太「まだ持ってたんだ」

紗季「……うん」

水乃「……あの——」

水乃「何かを言いかけるが、言葉が出ず黙って頭を下げる。」

朔「石段を下りて向かってくる。」

紗季「……変だと思ったでしょ。産まれてもない、ましてや人の形もしてないのに結婚

させて供養したいなんて」

陽太「目をそらし遠くを見つめる。」

紗季「でもこうでもしないと気が済まないの。つわりとか感じる前に……だったから。親

として、何もできていないから」

朔「紗季を見つめる。」

紗季「へーらッと笑って」ただの、自己満足

水乃「——分かります」

紗季「え？」

水乃「自己満足かもしれないけど、でも……。私たちは残されたから」

紗季「水乃をじっと見つめる。」

水乃「何か形にしたいって気持ちには分かりません」

紗季「……うん」

陽太「紗季の肩を抱く。」

紗季「陽太を見て微笑む。」

タクシ「が走って来て停まる。」

紗季「あなた名前は？」

水乃「……水乃です」

紗季「いい名前……。女の子だったら真似してたかも」

陽太「タクシに荷物を入れて紗季を見る。」

紗季「ありがとう」

紗季「タクシに乗り込む。」

陽太「会釈してタクシに乗り込む。」

水乃「頭を下げる。」

走っていくタクシ。

朔「タクシを見送る。」

○アパート・リビング

美奈枝「ソファに座っている友介と大介。」

大介「そっちでも迷惑かけてるのか、あいつは」

美奈枝「申し訳ございません」

友介「いやいや！何か事情があったのかも

しれないし。ただ事故とかに遭ってなければ

ばいいんだけど」

大介「兄さんもほっとけよ」

友介「そんなわけにもいかないだろ。よく分

からないけど、インターネットに顔とか住

所とか載せられて大変だったんだろ？」

美奈枝「うっむく。」

友介「それで高校も辞めることになったんだ

し……。あの子は今不安定なんだよ。大人

が守ってやらないと」

美奈枝「過呼吸になる。」

大介「美奈枝、美奈枝に駆け寄る。」

大介「……美奈枝の背中を擦りながら、
……自業自得だろ」

○寺・山門

水乃「石段を上ってきた朔と水乃。」

水乃「余計なこと言っちゃったかな……。口

コミに悪く書かれてたらごめんさい」

朔「別に変なことは言っていないんじゃない。

分かんないけど」

水乃「水乃、策をチラッと見て、

水乃「朔さんは冥婚絵馬アンチだもんね」

朔「アンチじゃないよ。やめて。ただ……俺

はあんまり理解できないってだけで」

水乃「亡くなった人を供養したたって気持ち

になったことない？」

朔「あんまピンと来ないんだよね。じいちゃ

んもばあちゃんも、どっちも生きてるし」

水乃「立ち止まる。」

朔「振り返る。」

× × ×

(フラッシュ)

田崎さくら（16）、振り返り笑う。

水乃「もしさくら崎さんが死んじゃってたら？」

○アパート・リビング

大介、美奈枝の背中を擦る。

大介「元はと言え、あいつが後輩の女の子をネットでいじめたんだろ。それが自分に返ってきただけ。家族にまで迷惑をかける……」

友介「誰でも間違いは起こすだろう。朔はま

だ子どもなんだから私たちが――」

大介「あいつのせい！ どれだけ迷惑をかけるられたか。家も、職場も荒らされて……。示談金もいくら払わされたと思ってるんだ」

大介「もう……顔も見たくない」

○寺・山門

立ち尽くしている朔。

水乃「……朔をじっと見つめている。」

朔「……あんた関係ないでしょ」

朔「関係ない奴が！ 制裁だ私刑だって、うるさいんだよ！ 俺に、俺たちに関わってくるな！」

朔、水乃から目をそらす。

スマホの着信音。

水乃、スマホを見て、

水乃「（画面を見つめて）……」

朔、ふと水乃の方を見て、

朔「何」

水乃「いや、なんでもない」

水乃、スマホをしまう。

○同・本堂前（夕）

掃き掃除をしている朔。

和彦、歩いてきて、

和彦「友介さん、今日は東京でホテル取るって」

朔「……怒ってましたか？」

和彦「いいや。朔をよろしくって」

朔「……そうですか」

和彦「水乃ちゃん呼んで来い。飯にすんべ。あの子、昼も食ってねべ」

和彦「歩いている。飯にすんべ。」

○同・本堂（夕）

冥婚絵馬を前にして、座っている水乃。

朔「飯、どうする？」

朔「水乃、慌ててスマホを床に置く。」

朔「ていうかご住職にも言ったら？　そういうの分かるんじゃないの」

水乃「大丈夫。お世話になったのに、怖がらせたくないし」

朔「俺は怖がらせて脅していいのかよ」

水乃「……さっきはごめんなさい」

朔「水乃、水乃を見る。」

水乃「さくら崎さん、高校の後輩なんだってね。それがSNSでバズったから嫉妬して、誹謗中傷してトレスして……。確かに悪いけど個人情報晒されるのはひどすぎるっていうか」

水乃「水乃、朔にスマホを見せつける。」

水乃「朔、ため息をつく。」

水乃「別界限で盛り上がってたの、流し見してただけだから、よく知らなくて。脅したりしてごめんなさい」

朔「……もういいよ」

水乃「……たろくんもそうだったの。ちょっと同じグループで揉めて、それが大きくなつて。みんな、顔も見せないくせに好き勝手言ってる顔、見せないからだろ」

水乃「私、拳をぎゅっと握り締める。」
 水乃「とあつて。そのときにすごい怒られたの。」
 朔「……バカなこと言うなって？」
 水乃「そう。だから私、誰かに死にたいって
 言われたら、こうしようあしようにって考
 えてたんだけど、いざたろくんに言われた
 ときに……。バカなこと言わないでって言
 っちゃった」
 水乃「水乃、へらッと笑ってみせる。」
 水乃「だってバカなことなんだもん。ただ息
 をして、おはようって投稿しておやすみつ
 て投稿するだけで。生きてるだけで救われ
 る人間がいるのに。それで死にたいなんて、
 バカみたい」
 水乃「水乃、うつむく。」
 水乃「私がこんなだから、たろくんは……」
 スマホの着信音。
 床に置いていた水乃のスマホの画面が
 が光る。
 朔「水乃のスマホの画面を見る。」
 水乃「水乃、慌ててスマホの画面を伏せる。」
 朔「ねえ、今の」
 水乃「朔、水乃のスマホを手取る。」
 水乃「やめて！」
 朔「朔、スマホを見ると、SNSの通知が
 来ている。」
 『やっぱりこれたろじゃない？あの
 人生きてたよ』とDMが来ている。
 朔「は？」
 水乃「水乃、朔からスマホを奪う。」
 朔「どういうこと？」
 水乃「水乃、朔と視線を合わせようとしな
 い。」
 朔「水乃、水乃を見る。」
 水乃「水乃、走って出て行く。」
 朔「ちよっと！」
 ○同・山門（夕）
 水乃「水乃、走ってくる。」
 朔「水乃、水乃を追いかける。」

朔「待ってって！」

朔、水乃の腕を掴む。

朔「何、さっきの」

水乃「……」

水乃、朔にスマホを渡す。

朔、スマホを見ると、『た』というS

N Sアカウントが表示されている。

プロフィールには『前世分かってても言

及しないよね』と書いてある。

朔「これがたろ？ 死んでなかったってこ

と？」

水乃「……たろくんは死にました」

朔「でもこれさ、十七歳って書いてるし、誕

生日八月になってるし」

水乃「……はい」

朔「何だよ。ただトラブって嫌になって死ん

だふりしただけだったんじゃない」

水乃「……フォロワーさんも、そう言ってま

した」

朔「まあでも生きててよかったんじゃない？」

朔、『た』のSNSの投稿を見ると、

『＃裏垢女子と繋がりたい』『＃彼女

募集中』とタグがついた投稿をしてい

る。

朔「あ……」

水乃、石段を見下ろす。

朔、水乃の腕を掴む。

水乃、振り返る。

水乃のサングラスに朔の姿が映る。

朔「いやいやいや。何考えてんの」

水乃「……離して」

朔「あんたさっき生きてるだけで救われるっ

て言ってたじゃん」

水乃「……そうだよ」

朔「言ってることと違うじゃん」

水乃「……うっむく。」

朔「ただ全部うざくなってるリセットされただ

けでしょ。ネット恋愛なんだからおさら」

水乃「……そうだね」

水乃、寺に向かって歩いていく。
水乃の背中を見つめる朔。
スマホを見ると、『た』が『顔晒した
ら伸びるらしい』という文と、髪と手
で顔を隠し片目しか見えていない自撮
り写真を投稿している。
朔「顔見えねえよ」

○同・庫裏・居間（夜）

和彦「夕食を食べている朔と和彦。」

朔「あー、失恋して食欲ないそうです」

和彦「おめえ振ったのか！」

朔「いや俺じゃなくて」

和彦「はー。最近の若いのは複雑だなあ」

朔「首をかしげる。」

和彦「そういうときこそ、優しい言葉かけて

助けてやんねど」

朔「はあ……」

和彦「明日は祭りもあるし、誘ったらいいん

でね？」

朔「ふすまが閉まった和室の方を見る。」

○同・同・寝室（夜中）

和彦、いびきをかいて寝ている。

朔、布団を被りその中でスマホを見て

いる。

S N Sで『高橋朔』と検索すると、関

係ない投稿が表示される。

少しスクロールすると、朔の顔写真が

出てくる。

慌ててスマホを消す朔。

ため息をつく。

○同・同・台所（深夜）

朔、水を飲む。

ふと和室の方を見る。

○同・同・和室前（深夜）

朔、ふすまに耳を寄せる。

朔「起きてる？」

軽くふすまをノックする。

返答がない。

朔、少しづつふすまを開ける。

布団が敷いてあるが、誰もいない。

朔「え」

○同・本堂（深夜）

朔、入ってくる。

見渡すが、誰もいない。

壁の冥婚絵馬を見つめる。

朔
「
:
:
」

朔、走って出て行く。

○同・山門（夜中）

朔、走ってくる。

石段を見下ろすと、深い闇に包まれている。

朔、息を吐いて恐る恐る下りる。

○山道（夜中）

ゆつくり石段を下りてくる朔。

石段の終わりに、水乃が腰かけている

後ろ姿

乃！

水乃、振り返る。

朔、水乃に

してんの」

水乃「海ってどうやったら行ける？」

朔「海？　こっからだいぶ遠いけど」

水乃「そう……」

朔「何がしたいの」

水乃「水があるところに行きたい」

朔
「何だそれ

朔、水乃の隣に座る。

朔「……たろってやつ、顔写真出してたけど

たいしたことなさそうだよ。まあほとんど

隠してたけど」

水乃、遠くを見つめている。

朔「ブスだからじゃね？」
あんたに写真送ら

なかったのだって、顔見たら幻滅されるからで」

水乃「水乃、首を横に振る。」

水乃「私が、嫌だって言ったの。交換しようって言われたけど断った」

朔「ああ、そう……」

水乃「朔、水乃をじっと見つめる。」

水乃「ブスだから、私」

水乃「そうかな。分かんないけど」

水乃「さくら崎さんにブスとか言うくらいだから、私の顔なんてグロって言うかも」

朔「それは……言葉の綾で……」

朔「朔、水乃から目をそらす。」

水乃「あ、寺の裏に池あるよ。汚いけど」

○裏山（夜中）

虫や鳥の鳴き声が響く。

朔・水乃、歩いている。

池が見えてくる。

朔「ここ」

木や藻が浮いている小さな池。

水乃「池を見つめる。」

朔「水があるとこ行きたいって何。今度は河童みたいなこと言って——」

水乃「池に飛び込む。」

朔「は」

水乃「息苦しうに水面から顔を出す。」

朔「何やってんの！」

水乃「バタバタと暴れている水乃。」

朔「ちよっ……！」

朔「朔、池の中に入ろうとして一瞬躊躇う。」

朔「——もう！」

朔「朔、池に入り、水乃の元に向かう。」

朔「おい！」

朔「後ろから水乃の身体を抱きかかえる。」

無言で暴れる水乃。

朔「ビショビショになった水乃の帽

子・サングラス・マスクを取る。」

朔「ここ浅いから！」

朔「クッサ……。最悪」

朔「水は……。飲んでないか。絶対腹壊すぞ」

朔「……。あのさあ、むかついたり悲しくなる

の、は分かるよ。だからそれだけでいいんじゃないの」

朔「顔も知らない相手だったんだから、やな

やつだったなあで、それで終わりでいいじ

やん」

水乃「……。うん」

朔「……。上がるう。汚いから」

水乃「……。朔の方に振り返る。

月明かりが水乃の顔を照らす。

朔「あ……。水乃の顔には、目も鼻も口もある。

水乃「……。顔をひそめて」え？」

朔「顔……。水乃、慌ててサングラスをかけようと

する。

朔「違う。顔、ある、よ」

水乃「え？」

朔「そんな顔してたんだ」

水乃「（笑って）かわいいじゃん」

○寺・庫裏・居間（日替わり・朝）

和彦「おはようございます」

朔「おはようございます」

水乃「帽子・サングラス・マスクは外してて、

顔がある。」

水乃「おはようございます」

和彦「おお。おはよう」
水乃「台所、お借りしました」

和彦「朝食を囲んでいる朔・水乃・和彦。
料理上手なんだなあ！ 水乃ちゃん

水乃「家で自分でやるしかないんで」

朔「水乃を見る。
水乃、一口食べて、頬がほころぶ。

和彦「いいお嫁さんになるなあ」

水乃「（微笑んで）なりますかね」

朔「……そういうの時代錯誤ですよ」

和彦「いけね」
笑う和彦と水乃。

○同・本堂（夕）
友介、入ってくる。

和彦「おお、友介さん」

友介「お世話になりました」

和彦「いいの、いいの。おい朔くん」
朔、廊下から本堂に入ってくる。

朔「あ」
友介「朔」
朔、友介から目をそらす。

友介「ただいま」

朔「……おかえりなさい」
水乃、入ってくる。

水乃「あの、雑巾って」
友介「水乃を見て、

友介「……水乃さん？」

水乃「あ……はい」
友介「それが、あなたの顔なんです」
水乃「……そうです」

朔「座っている朔・水乃・友介。
夜に急にね」

朔「あ、それで冥婚絵馬のことも解決した」

友介「解決？」
朔「本当は死んでなかったんだよ」

友介、水乃を見る。
朔「とうとうこれで、描く必要なし。全部解決」

友介「そうか」
水乃「ご迷惑おかけしました」

友介「いえいえ。私たちは何もしていませんから」

水乃「ありがとうございます。帰ります」

朔「え」
友介「駅まで送りますよ」

朔「あの！」
朔、立ち上がる。

朔「……急いで帰らなくてもいいんなら、もうちょっといれば？ 今日夏祭りあるみたいだし」

水乃「え？」
朔「気分転換に、行かないかなあとか」

水乃「（微笑んで）行きたい」
朔「あ、まじ？ じゃあ、うん、行こう」

水乃「（友介に）あ、でも駅には送ってもらってもいいですか」

友介「うん？」
水乃「お母さんにお土産買いたくて。駅にお店、ありましたよね」

友介「ああ。いいですよ」
水乃「（朔に）じゃあ、あとで」

朔「うん」
○車内（夕）

運転している友介。
助手席に座っている水乃。

友介「お母さんは甘いもの召し上がる？」
水乃「どうかなあ。聞いてみます」

水乃「スマホを操作する。」

水乃「スマホを操作する。」

水乃「スマホを操作する。」

水乃「スマホを操作する。」

友介「お母さん、心配してらっしゃったでしょう」

水乃「水乃のスマホ画面には『お母さん』とのメッセージアプリが表示されている。毎日『食費』というキャッシュレス決済のリンクが送られてきている。水乃「……はい。おいしいものを買っていいかな」と」

○寺・山門（夕）

朔「鼻歌を歌いながら掃き掃除をしている。ふと石段の先を見ると、老婆の姿が見える。」

朔「檀家さんかな」

朔「寺の方を見る。再び石段の先を見ると、老婆が消えている。」

朔「あれ」

朔「石段の先を見つめる。」

和彦「朔くん、歩いてくる。」

朔「はい」
和彦「せがれのお古なんだけど」

○商店街（夕）

お囃子が響く中、祭りが行われている。多くの人で賑わっている。

朔「浴衣姿の朔、電話をかけている。」

朔「（電話が繋がって）あ、やっと出た。おじさん、この前電話の夕方教えたよね」

友介（電話）「すまない、変なところを押してしまった」

朔「まあいいや。買い物終わった？ もう会場で待ってるんだけど」
友介（電話）「水乃さんがいなくなった」

○駅・ロータリー（夕）

友介「走ってくる。」

朔「いなくなっただってどういこと？」

友介「車止めてくるから先に行ってもらった
ら、どこにもいなくなってる」

朔「はあ？」

友介「荷物は車に積んだから、帰ってない
とは思わなかった」

朔「迷子とかになってるんじゃない。交番行こう」

朔「走り出そうとする」

友介「朔」

朔「何」

友介「全部解決したって言ってたけど」

朔「ああ、そうだよ。顔あるし彼氏死んでな
いし」

朔「走っていく」

朔「走っていく」

○商店街（夕）

人でごった返している。

商店会のテントに警察がいる。

警察と話している朔と友介。

警察「この人だからねえ」

男「アナウンスで呼びかけてみっか？」

友介「お願いします」

警察「どんな子？」

朔「えっと、目がぱっちりしてて、鼻が小さ
くて」

帽子・サングラス・マスクをつけた女
性、テントの脇を駆けて行く。

× × ×

夜になり、ますます賑わってきた。

友介「ご住職に連絡したけど、寺には戻って
ないって」

朔「素直にたいたいなんて言うわけないじゃ
ん。行ってみよう」

アナウンス「このあと、七時五十分より打ち
上げ花火が始まります」

○山道（夜）

友介の車が石段の前に停まる。

朔「車から降りる」

朔「おじさんはここら辺回ってみて！」

朔「石段を上る」

○同・山門（夜）

和彦、懷中電灯を手に、周囲を見渡す。

朔、石段を上ってくる。

和彦「朔くん！水乃ちゃんは」

朔「スマホも繋がらないです。ちょっと裏山

も見てください」

和彦「これ持ってけ！」

朔「はい」

和彦「和彦、朔に懷中電灯を渡す。

和彦「水乃ちゃん！」

○裏山（夜）

朔、池の前に走ってくる。

荒井呼吸を整え、ゆっくりと懷中電灯

で池を照らす。

水乃の姿はない。

朔、ため息をつき、しゃがみ込む。

火花が打ちあがる音。

朔、空を見ると、火花が打ちあがって

いる。

朔「（見つめて）……」

○寺・本堂前（夜）

朔、とぼとぼ歩いてくる。

本堂から物音がする。

朔、気になり本堂に向かう。

○同・本堂（夜）

朔、入ってくる。

人影が見える。

朔、懷中電灯をつけようとするが、点

かない。

朔「あれ」

人影が朔に気づく。

朔「……水乃？」

火花が打ちあがる音。

火花の光で、本堂が明るくなる。

照らされた人影は老婆だった。

朔「うわあ！」
 朔「ひい！」
 老婆「手伝ってぐれね？」
 老婆「手え、気づげでね」
 朔「はい……」
 老婆「ご住職も絵師さんも電話でねがら、お
 ら一人でやってたのよ」
 老婆「ああ、どうもねえ」
 老婆「おらの息子だ。今日が命日なんだ」
 朔「持つて帰るんですか？」
 老婆「いんや。この結婚は破談。描き直して
 もらうのよ」
 朔「え」
 老婆「かわいそうなごどすたつけ」
 老婆「息子は、男が好きだったのよ」
 朔「え、ゲイ？」
 老婆「そうそう。若え人はすぐ受け入れられ
 んべげんども、当時のおらにはでぎねがつ
 た。……二十年も、かかちまった」
 老婆「女を好きになれねぐで、不憫でなあ。
 せめて、あの世では結婚して一人前になつ
 てくれって」
 老婆「微笑んでいる絵の中の男性。
 がった顔。本当の顔でねえ」
 朔「冥婚絵馬を見つめる。」
 和彦「いたか？ あれ、鈴木さん？」
 老婆「あー、どうもどうも」
 スマホの着信音。

朔、スマホを見る。
友介「朔？」

朔のスマホ画面には『うおた』の新し
い投稿の通知。
『帰りました。ごめんなさい。』と投
稿している。
朔「……ううん」

○一軒家・朔の部屋（日替わり・朝）
寝転んで、筆を持つている朔。
筆を見つめて、息を吐く。

○同・書斎（朝）
冥婚絵馬を描いている友介。
朔、入ってくる。

朔「おじさん」

友介「うん？」

朔「出かけてくる」

友介「うん。どこに？」

朔「……東京。顔、見たい人があるんだ」

友介「うん。そうか」

朔「行ってきました」

朔、出て行く。

友介、再び冥婚絵馬を描き出す。

○駅（東京）・構内
人で賑わっている。
キヤップ・マスクをつけた朔、うつむ
いて歩いている。

○歩道
朔、うつむいている。
高校生が通っていく。
少し顔を上げると、目の前には高校の
正門。
『虹が原学園』の銘板がかかっている。
さくら、正門から出てくる。
朔、気づいて向かおうとするが、足が
動かない。
女子の声「バイバイ」

さくら「じゃあねー」

朔「顔を上げ、キャップとマスクを外し、さくらに駆け寄る。」

朔「――さくら！」

さくら「――さくら、振り返る。」

さくら「――朔先輩」

女子「周囲にいた高校生たち、朔に気づいて、あの人、高橋朔じゃない？」

男子「何しに来たの？」

男子「またさくら崎に何か」

男子「朔、顔を取り出す。」

朔「顔を背ける。」

さくら「朔に駆け寄り腕を掴む。」

驚いてさくらを見る朔。

さくら「先輩、こっち！」

さくら「朔の腕を引いて正門内へ走る。」

○高校・美術準備室

さくら「さくら・朔、入ってくる。」

さくら「さくら、椅子を差し出し、

さくら「どうぞ」

朔「会釈して座る。」

さくら「ここなら誰も来ないんで。個展が近いからって、先生が貸してくれたんです」

朔「部屋を見渡すと、多数の絵が置いてある。」

さくら「まあずいとか、他の人には言われてますけど」

朔「視線を外して床を見る。」

さくら「さくら、部屋を片付けながら、

朔「――今日はどうしたんですか？」

朔「――さくらにお願いがあつて」

さくら「はい」

朔「知り合いが、連絡つかなくて。どこにいるのかも分かんなくて。もしできたら、さくら崎のアカウントで呼びかけてもらえないかなと思って」

さくら「――なるほど」

さくら「さくら、朔の向かいに座る。」

さくら「――スマホを操作しながら）ちょうど

今個展でフォロー増えたので、役に立て
 ると思います」
 朔「いいの？」
 さくら「朔先輩の頼みですから」
 さくら「朔先輩には迷惑かけちゃったから」
 朔「え？」
 さくら「フォロー増えると、厄介なもの増
 えるんです。ファンのフリしたアンチみた
 いな。過激派っていうんですかね。そうい
 う人たちが朔先輩のことを……」
 さくら「開示請求も、本当はやるつもりな
 ったんです。でも事務所の大人が、抑止力
 にもなるからって、親と話して勝手にやっ
 ちやって」
 さくら「頭を下げる。」
 さくら「本当にすみませんでした。ずっと、
 お世話になってきた先輩なのに」
 朔「……いや」
 さくら「なので、私にできることなら何でも
 やります。こんなじゃ、罪滅ぼしにもな
 らないでしょうけど」
 さくら「再びスマホを操作する。」
 朔「さくらの絵を見つめて、黙ってい
 る。」
 さくら「その方、アカウントとかあります？
 もしかしたらフォローの中に繋がってる
 人いるかも」
 朔「――さくら」
 さくら「（スマホを見たまま）はい」
 朔「こっち見て。――俺も見から」
 さくら「手を止め、ゆっくり顔を上げ
 る。」
 朔「……まっすぐ見つめ合う朔とさくら。
 ……ネットでさくらのことを悪く書いた」
 朔「絵がうまくて、朔をじっと見つめている。
 教えたらずぐフォローが増えて。SNS
 って。かわいって、絵以外のことでも」

てはやされて。調子乗ってんなこいつって。
先輩先輩って話しかけて来るけど、本当は
俺のことバカにしてんだろって。描くこと
から逃げてる俺に見せつけるために、そん
な頑張ってるんだろって。こいつのこと、め
ちゃくちゃにしたいって」

朔「下手くそ。パクリ。センスない。トレス
してる。一段々と声が震えてきて」バカ。
ブス。インフルエンサー。気取り。承認欲求
の塊。枕営業。キモイ。：：嫌い」
さくら、表情を変えずに朔を見つめて
いる。

朔「全部、俺が書いた」
朔、さくらをじっと見つめている。

さくら「：：（微笑んで）やっ」と顔見て言っ
てくれましたね」

朔「本当にごめん」
朔、椅子から降り、土下座する。

朔「ごめんなさい：：」
さくら「：：朔先輩」

朔「：：朔先輩」

さくら「：：私許しません」

さくら「許しません：：。許しません：：」

さくら「許しません：：。許しません：：」
さくら、朔の肩を叩く。

さくら「さくら、朔の肩を何度も叩きく。
約束したじゃないですか。もう無理ですよ」

朔「：：ごめん」

さくら「許しませんから：：」
さくら、泣き崩れる。

○同・校庭

さくら「朔、歩いている。」

朔「朔、振り返ると、さくらが窓から手を
振っている。」

さくら「先輩！絵、描いてますか？」

さくら「朔、さくらをじっと見上げる。
描いてくださいね！私も、描きま

すから！」

さくら、笑顔で手を振る。
朔、微笑んで手を振り返す。

○繁華街

朔、スマホを見ている。
スマホ画面にはSNSで、先ほどの朔が盗撮された写真が投稿されている。
朔、ため息をつく。
顔を上げて、歩き出す。
スマホの着信音。
朔、スマホを見ると、『父』から電話がかかってきている。
画面を見つめて硬直する。

○寺・庫裏・縁側

友介・和彦、並んで座っている。
菓子を食べている。
和彦「そうか。朔くん、東京さ行ったか」
友介「はい」
和彦「もう友介さんは行がねぐでいいの？」
友介「……はい。大丈夫です。朔は、きっと、もう顔を上げて歩けるはずです」
和彦「そっかそっか。」
友介「はい。それで、この前東京で昔の恩人に会ってきたんです」
和彦「若えごろに世話になったっていう和尚さん？」
友介「はい。水乃さんの顔のこと、何か分からないかと思って」
和彦「最初はびっくりしたんだげんと、戻ってみんなハッピー、でねえの？」

○マンション・寝室

ベッドの上に寝転んでいる水乃の後ろ姿。
蝉の音が窓の外から聞こえる。

○アパート・玄関

美奈枝、ドアを開ける。

朔「……：久しぶり」
ドアの前にいたのは朔。

美奈枝、朔から目をそらす。
朔、美奈枝の視線の動きに気づいて、
少しうつむく。

○同・リビング

美奈枝・朔、入ってくる。
ソファに座っている大介、朔を見よう

としな。朔「……：何で東京来てるって分かったの」
大介「……：お前がまたネットに載ってるから

だろ！」
大介「……：お前がまたスマホをテーブルに叩きつける。
朔「……：ちょっとこっちに用事あったから」

大介「……：もう俺らに迷惑をかけるな。知ってる
か？」
母さんな、また薬増えたんだ」

美奈枝「……：お父さん、それは……」
大介、朔の胸倉を掴む。
朔、まっすぐ大介を見つめる。

大介、朔から目をそらし手を放す。
スマホの着信音。
美奈枝、耳を塞ぐ。

朔、スマホを見るとさくらから電話が
かかってくる。朔「……：電話に出てもしもし」

○高校・美術準備室
さくら「……：朔先輩？ 水乃さんって方のこと呼
び掛けてみたんですけど」

朔（電話）「……：ありがとう」
さくら「……：微笑んでいえ。でも、水乃さん
本人の情報は何も出てこなくて。代わりに

彼氏さん？ の」
○アパート・リビング
大介、美奈枝の背中を擦る。

大介「……：美奈枝の背中を擦る。」

大介「……：美奈枝の背中を擦る。」

朔「たろ？」

さくら（電話）「そうです！ それでたろさ

朔「うん。分かった。あと送っておいで。本

当にありがとう」

朔、電話を切る。

大介「おい。どこに行く気だ」

朔「：行かないと」

大介「もう勝手なことはさせない！」

大介、朔の身体を掴む。

揉み合いになる朔と大介。

朔、大介を振り払う。

大介「あ！ ごめんなさい！」

大介「：どこで間違えたんだろうな」

大介「絵の勉強なんて、最後まで反対すれば

よかったのか？ 俺がもつと、家にいれば

よかったのか？ 俺がもつと、家にいれば

たんだよ：。教えてくれよ！」

大介、床に突っ伏し泣き叫ぶ。

美奈枝、大介の背中を擦る。

朔、大介を見つめ、突っ立っている。

美奈枝、朔をまっすぐ見つめ、

美奈枝「朔」

朔「：はい」

美奈枝「いつてらっしゃい」

朔「え？」

朔を見つめる美奈枝。

朔、大介・美奈枝に向かって頭を下げ

朔「本当にごめんなさい」

朔、顔を上げて、

朔「行ってきます」

○住宅街（夕）

朔、スマホを見ながら、周囲を見渡す。

スマホの画面にはさくらとのメッセージ

ふと道路の方を見ると、花束や缶ジュースが横断歩道脇に置いてある。

朔「（見つめて）……」

女性「女性、朔に近づいて、

女性「あのう……」

○一軒家・玄関（夕）

女性、チャイムを押す。

女性の後ろに立っている朔。

本地洋子（呂）、ドアを開ける。

女性「本地さん。また見つけた。優次郎くん

のお友達。高橋さんだって」

朔「え？あの」

洋子「ありがとうございます」

女性「いいのよお。また痩せたんじゃない？

気をしつかりね」

女性、去る。

洋子「同じ学校かしら」

朔「えつと、あの」

洋子「……たろのお友達？」

朔「あ……」

○同・リビング（夕）

朔「お邪魔します……」

朔「朔、ふと見ると、本地優次郎（呂）の

遺影と位牌が飾られている。本名は優次郎

洋子「（気づいて）たろです。本名は優次郎

といいます」

朔「あ……：そうでしたか。あの、手を合わせ

ても？」

洋子「ありがとうございます」

朔「朔、遺影の前で合掌する。

遺影を見つめる。

洋子「交通事故でした」

朔「え」

朔「朔、洋子を見る。

洋子「たまたま、優次郎が歩いていて。たまた

たま、運転手が余所見をしていて。たまた

ま……」

朔「……ご冥福をお祈りいたします」

洋子「高橋さんは、優次郎のネットのお友達

なのよね」

朔「何というか」

洋子「じゃあ水乃ちゃんともお知り合いかし

ら」

洋子「亡くなった二週間後くらいかな。横断

歩道のところで泣いてたって横山さん……

さっきの方が連れてきてくれて」

朔、遺影を見つめる。

洋子「優次郎から、水乃さんのことは聞いて

いたの。珍しく話しかけてきたと思ったら、

八月に会わせたい人がいるんだ、なんて。

ネットとかは、正直よく分からなかったけ

ど、あんなに嬉しそうな優次郎、久しぶり

に見た。それが……」

洋子、遺影を見つめる。

○（回想）駅・改札

歩いていく水乃の後ろ姿。

帽子・サングラス・マスクはつけてい

ない。

洋子の声「水乃ちゃんがいろいろ教えてくれ

て、優次郎のスマホを触ったの。それで、

ネットのお友達にも、優次郎が亡くなった

ことを伝えて」

次々と改札を歩いていく人々。

水乃の番になり、ICカードを改札に

かざすが、ゲートが閉まる。

『残高不足です。チャージしてください

い』と改札からアナウンスが流れる。

迷惑そうに、水乃の背後から避けてい

く人々。

改札で立ち尽くす水乃の後ろ姿。

○（戻って）一軒家・リビング（夕）

朔、スマホを見る。

スマホ画面には『たろ』のSNSの投稿が表示されている。

洋子「水乃ちゃん、元気？」

洋子「（微笑んで）水乃ちゃんに伝えてください。優次郎が……たろがいなくても、幸せに生きてって」

○住宅街（夕）

朔、歩いてくる。

横断歩道脇の花束に向かって合掌している女性の後ろ姿。

よく見ると、帽子・サングラス・マスクをつけた水乃だ。

朔、気づいて、

朔「あ」

水乃、朔に気づいて駆けだす。

朔「待って！」

朔、慌てて水乃を引き寄せ抱きしめる。

朔「あつぶな……」

勢いで水乃のサングラスが地面に落ちる。

水乃、慌ててしゃがんで拾おうとする。

朔、しゃがんで水乃の腕を掴む。

水乃の帽子とマスクをゆっくり外す。

朔「なんで……顔、戻ったはずじゃ——」

水乃、サングラスをかけ、帽子を被る。

水乃「……ごめんなさい」

水乃、マスクをつける。

○公園（夕）

朔・水乃、ベンチに横並びで座っている。

朔「たろ……優次郎さんの家に行った」

水乃「……お母さん、元気だった？」

朔「うん、たぶん。水乃ちゃんは元気かって、

聞かれた」

水乃「……」

朔「あ、水乃をチラッと見る。」

水乃「あ、知らなかった。何々の親族ですつてやつ、あれ本当に親族の人が書いてたんだね」

水乃「水乃、指のさくれを気にしながら、書いてるんだと思ってた」

朔「：よくあるよな」

水乃「たろくんも、そうであってほしかった。みんなに責められたのが嫌になって、私がうざくなつて、全部リセットしたくなつて、死んでほしかった」

水乃「どうして私のことなんか、親に話すの。私なんて：合わせる顔がないのに」

朔「水乃の肩に触れようとして、やめる。」

水乃「どうすればいいの：。本当に、残されちゃった私は、どうすればいいの」

朔「朔、スマホを見る。」

朔「：よし」と頷いて、

水乃「え？」

朔「冥婚絵馬、描こう」

○新幹線・車内（夕）

朔「家、デッキに立っている朔と水乃。」

水乃「フォロワーに中学の同級生っぽい人が

いて。その人の前の投稿に制服、ちよつと映ってたから。そっから」

朔「こわ：」

水乃「：そんなのは全部分かるのに、たろくん：優次郎くんのことは何も知らなかった」

水乃「水乃、窓の外を見つめている。私のどこが好きだったとか」

新幹線がトンネルに入り、窓に水乃の姿が反射する。

水乃「水乃、朔を見て、お嫁さんになったら教えてくれるかな」
朔、水乃をじっと見つめる。

○駅・ロータリー（夜）

朔・水乃、歩いてくる。
友介、車から降りて来る。

朔「ただいま」
友介「……おかえり」

友介「遠いところ、よく来てくれました」
水乃、会釈する。

○車内（夜）

運転している友介。
助手席に座っている水乃。
後部座席に座っている朔。

友介「私の、恩人の方に聞いた話なんですが」
水乃、友介を見る。

友介「顔というのは、とか不思議なものらしいです。同じ顔でも、見る人によって持つ印象は違ってくる。それに本人すら、鏡で自分の顔を見ても、それが本当の顔とは限らないらしいです」

水乃「本当の顔……」
友介「それは、仕方のないことなんです。ね。だからこそ、私たちは絵を描き、自分の見たものを形にしようとする。本当の顔を求めて……」
朔、水乃の後頭部を見つめている。

○寺・本堂（夜）

友介、ろうそくに火をつける。
朔・水乃、向かい合って座っている。

友介「じゃあ朔。あとはよろしく頼むね」
朔「はい」

友介、出て行く。
朔、カバンからスケッチブックや画材を取り出す。
朔、鉛筆を持ち、見つめる。

息を吐き、描き始める。
水乃、壁の冥婚絵馬を見上げる。
帽子・サン格拉斯・マスクを外す。
顔がない。
朔をまっすぐ見つめる。
鉛筆で描く音が響く。

○裏山（夜）

池の回りで虫や鳥の鳴き声がある。

○寺・山門（夜）

石段が月明かりで照らされる。

○同・本堂（夜）

朔をじっと見つめている水乃。

朔、鉛筆を置く。

水乃、朔を見つめている。

朔、スケッチブックを水乃に見せる。

そこには優次郎の袴姿の絵と、顔がない白無垢の女性の絵が描いてある。

水乃、立ち上がる。

水乃「池飛び込んでくる」

朔、慌てて立ち上がり、水乃の腕を掴む。

朔「やめろって！」

水乃「だって！　じゃないと顔がな

いと、結婚できない……」

水乃「朔の手を払う。」

水乃「私はどうやったって、たろくと別れ

られない。もう、いないから。さよならで

きない。じゃあ、ずっと一緒にいるしかな

いじゃない！」

風が入り込み、ろうそくの火が消える。

水乃、出口に向かい、戸を開ける。

月の明かりが入り込み、壁の冥婚絵馬

を照らす。

朔、冥婚絵馬を見つめる。

朔「――水乃」

水乃、振り返る。

冥婚絵馬の前の朔を見つめる。

朔「ちゃんと、さよならをしよう」

水乃「え？」

朔「冥婚絵馬に、生きている人を描いちゃいけない理由、分かった。ちゃんと、送り出すことができないからだ」

朔「残されたなら、俺たちはちゃんと別れを言っ、生きていかなければいけない。きつと、そういうことなんだと思う」

水乃「：：たろくんがいない世界を生きていくって？」

朔「頷く。」

水乃「たろくんがいないなら、私はその顔でいい！」

水乃「顔がない白無垢姿の女性の絵。」

水乃「顔なんて、なくていい！」

水乃「以下、水乃は後ろ姿しか見えない。思ってる。一人で生きてくなんて許さない、でしよう？」

朔「水乃をじっと見つめている。」

水乃「あれ：：」

朔「スケッチブックを手に取る。」

朔「水乃を見て、女性の絵に顔を描きこむ。」

朔「そんなの分かんないよ、俺だって！だから、生きていくしかないんじゃないか」

水乃「あ：：」

水乃「涙が床に零れ落ちて行く。」

朔「たろくん：：。たろくん：：」

水乃「顔を上げた冥婚絵馬を見つめる。」

スケッチブックを受け取り、見つめる。

優次郎の絵に、水乃の涙が落ちる。
水乃、スケッチブックを抱きしめる。
水乃「……さよなら」

○同・庫裏・玄関（一年後）
和彦、配達員から段ボールを受け取る。

和彦「ご苦労さん」

和彦、段ボールを見ると、差出人に

『高橋大介』と書いている。

和彦、段ボールを置いて、軒先まで出る。

青い空を見上げて微笑む。

○同・本堂

友介、男性に冥婚絵馬を差し出す。

男性「ありがとうございます。……いい顔だ」
友介、微笑む。

○裏山

朔、イーゼルを立て、風景画を描いている。

真ん中には女性の後ろ姿が描かれている。

スマホの通知音。

朔、スマホを見ると、SNSの通知が来ている。

『さくら崎』のアカウントが『また個展やります！』と投稿している。

朔、『いいね』を送る。

スマホをしまい、また描き始める。

近づいてくる帽子を被った女性の後ろ姿。

朔、気づいて振り返る。

水乃だと分かり、微笑む。

水乃、帽子を外し、本当の顔で微笑む。

【終わり】

